

生きる、働く、齢を重ねる

大 熊 玄

〈講師紹介〉

新潟出身。立命館大学史学科卒業後、金沢大学大学院（修士・博士）にてインド哲学を学ぶ。金沢大学非常勤講師、石川県西田幾多郎記念哲学館専門員・学芸課長を経て、2015年より副館長を務めるとともに、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科准教授。専門は、インド哲学、仏教学、西田哲学。また、哲学の立場から社会デザイン学を教える。著書『西田幾多郎の世界』、『鈴木大拙の言葉』など。

〈講演〉

はじめに

百歳まで生きることが珍しくない時代（人生100年時代）において、私たちはどのように生き、働いていけばよいのでしょうか。時代の変化に応じて、政策や社会制度がデザインされ直されるべきなのはもちろんですが、その元となる私たちの考え方も見直す必要があります。私たちは、仕事や加齢をどのように考えており、これからどう考えていけばよいのでしょうか。ベストセラー『ライフ・シフト』（リンダ・グラットン他）を紹介しつつ、日本のこれまで・これからの生き方・働き方について考えます。

1. 人生100年時代構想

政府が有識者会議を開いたおり、人生100年時代構想会議を行いました。9月30日の新聞にこの会議でこれから紹介する本の著者であるリン

ダ・グラットン氏を呼んで、話してもらったことや『ライフ・シフト』の内容が掲載されました。今、この話題が新聞を賑わしております。グラットン氏は著作の中で、高齢になっても仕事や社会との接点を持ち続け、よりよく生きるためには若い頃からの準備が欠かせないと書いています。インタビューにおいても、政府は助けることはできますが、生き方の選択に責任を持つのは個人であり、私たち一人一人がどのように生きていけばよいのかを考えておく必要がある時代だと言っていることを紹介しています。いわゆる、従来の社会は、教育、仕事、引退の単線型でした。今後は、教育と仕事、家庭を自在に行き来できる社会が必要になってくることに対して政府はどのように変わっていけばよいのかということ、人生100年時代構想会議で話し合われたことが取り上げられています。

しかし、読売新聞は今の与党に賛同的ですから肯定的に書かれています（1つの新聞だけを読んでいると考えが偏ってしまいますので、できるだけバランスよく、全く違う意見を読むことをお勧めします）、朝日新聞は政府に対して否定的なため、「私たちの職業人生は数十年単位で続くが、政府の指導者は数年単位で近視眼的になる」と書いています。つまり、政府というのは、4年ごとに選挙がありますので、長くて4年、短くて1年のスパンで物事を変えていくという意味で近視眼的だと言っています。当然、社会保障の財源など、未来に関する不愉快な真実を国民に語りたがらないというわけです。

2. 人間らしい働き方『ワーク・シフト』

(1) 主体的に築く未来

最初に私が押さえておきたいことを紹介します。「この先、私たちはとても大きな変化を経験するに違いないので、よい人生を送るための条件について、これまで漠然と抱いていた常識の多くを問い直す必要がある。変化に目を閉ざすのは無謀で危険だし、過去にうまくいったやり方が未来に通用すると決めつけるのも楽天的過ぎる。それは、自分と大切な人たちの未来を危険にさらす態度と言わざるを得ない。働き方の未来を的確に予測し、これは両方、精神的な幸福と経済的な豊かさを得られる働き方を見つけることは、将来の自分と大切な人たちにあなたが贈れるすばらしいプレゼントだ¹⁾」と言っています。私たちは、激変する社会の中でどのような働き方をしていくとよいのかということです。

昔と違って、過去の延長線上に未来を思い描くことが不可能になったため、今までロールモデルとしてお父さんやお母さんの世代を見て考えていたことができなくなりました。自分の子どもが私と同じ働き方をするもおそらくあり得なくなるだろうということも言っています。もちろん、変わらないものもあります。難しいのは、何が変わり、何が変わらないのかを見極めることが非常に難しいということです。さらに、SF作家ウィリアム・ギブスンの言葉を引用して「未来は既に訪れている。ただし、あらゆる場面に等しく訪れているわけではない²⁾」という何か気のきいたことを言っていますが、要するにどうなるかわからない、先が読めない時代に来ているということです。

リンダ・グラットン³⁾は、この未来を形づくるには5つの要因があると以下のように言っています。1つ目はテクノロジーの進化、2つ目はグローバル化の進展、3つ目は人口構成の変化と長寿化、4つ目は社会の変化、5つ目にエネルギー・環境問題の深刻化を挙げています。経済状況も変わるかもしれません。戦争とエネルギーは密着してい

ますけれども、環境問題がいろいろあり、予測のつかない世の中です。当然、仕事の内容が変わってきます。仕事の内容が変わることで仕事に対する私たちの意識も変わっていきます。つまり、社会がどんどん変化している中で、自分だけが変わっていないことになると非常に不幸な結果になるということです。不幸にならないためには、どうしたら私たちは意識を変えていくことができるのか、どこをどのように変えて、どこを変えずにいるのかということを考える必要があります。これは、運に身を任せるみたいな世界、未来ではなく、自分で主体的にある程度予測をし、自分で選択をし、バランスをとって自分の意思で決断することを考える時代が来ているということです。主体的に未来を築くことができる人が幸せに生き、人間らしく生きることができるということをこの『ワーク・シフト』では、言っています。

(2) 3つのシフト

①ゼネラリストから連続スペシャリストへ

今までのゼネラリスト的な技能を尊ぶ常識から、今後は未来に価値を持つ専門技能と能力を見極めて、それを身につけていくことが必要です。具体的に言いますと、AIに替わるような技能ではなく、機械では代替されにくい技能を身につけないといけないということです。自分に合った、将来性のある分野を選び、高いレベルで習得し、次の専門に移行するには、セルフ・マーケティング（自分を印象づける、評判を保つ努力をする）が重要となります。質の高い仕事して、自己アピールをします。このとき、既にある専門分野の知識・技能を深めることと環境変化に応じて別の専門分野に脱皮していくことへのバランスが大事です。広く浅い（多く少しの）知識・技能を持つゼネラリストから複数の深い知識・技能を持つ連続スペシャリストへのシフトです。1つのスペシャリストではなく、次の専門に移る姿勢が連続スペシャリストであります。

②「競争思考」から「協力思考」へ

リング・グラットンとは、今後、人と人との協力関係を原動力とする世界になっていくだろうと予測しています。多様な考え方が組み合わさることにより、重要なイノベーションへの道が開けるといことです。つまり、「ダイバーシティーはモノカルチャーを凌駕する」³⁾と言っており、自分自身ができるだけ多様性を受け入れることができるキャパを持ち合わせておくべきであるということです。このことは、年齢に関係はなく、大勢の人々が結びつき、どんどん集積効果が出ることで、専門家より正しい判断をくださる「賢い群衆」の誕生となります。さらに、対等の関係の人間同士が協力して仕事を進めることで世界が抱える課題を解決する「集合知」が重要となります。孤独にあくせく競い合うのではなく、他の人たちとつながり合いながら、もっとイノベーション精神を発揮できるようになる可能性が果てしなく広がっていくということです。例えば、今で言いますとネット上でのウィキペディアがそうです。いろいろな人がボランタリーにつくっていく百科事典です。20年くらい前に、ブリタニカの有料の大百科事典とウィキペディア、どちらが生き残るか話題になりました。当然ブリタニカだと思われていました。しかし、素人がみんなで協力してつくる百科事典が残るわけないと言われていたものが、今ではしっかり根付いています。自分の得意分野を少しずつ出し合うことによって、賢い群衆ができ、最良のアイデアがそこに集まってくるという社会があるのです。だから、みんなで協力し合うべきだという発想です。

さらに、第2のシフトの中でこの人が強調していることは、3つの人的ネットワークです。専門用語になりますが、①ポッセ（同じ志・少人数・信頼できる仲間）②ビッグアイデア・クラウド（大きなアイデアの源となる群衆）③自己再生コミュニティ（支え・安らぎ・温かい親密な関係）です。

つまり、人間らしい働き方とは、自分を中心に据えつつも他の人たちとの強い関わりを保てる働き方を見出すことであり、そのためには自分を再生させてくれるようなコミュニティが大事であ

り、ひとりぼっちにならないことだと言っています。

③追求する人生から生み出す人生へ

今後、物に頼らない幸福感へと徐々に変わっていきます。なぜなら、エネルギー、物資には限りがあるからです。つまり、お金を得るために仕事をして、物を消費することで幸せを感じていた時代から、充実した経験を味わうために働き、充実した経験をする中で、幸せを感じる時代へとシフトしていくということです。もちろん、給料もほどほどには受け取り、消費もしますが、ウエートの変化です。ウエートはお金をもらうことで、それを消費したときに幸せを感じるのではなく、お金をもらおうとする経験そのものが結構楽しい、結構幸せだと思える仕事にみんなが移っていくということを言っているわけです。ですから、消費をひたすら追求する人生から、情熱的に何かを生み出す人生が変わっていくということです。

研究、学問、仕事、なんでもそうですが、やり始めは楽しくて仕方がありません。最初は楽しくて一生懸命に勉強しますが、だんだん飽きてきます。飽きてくると今度は、決めたことだからと自分に言い聞かせ真剣に取り組もうとしますが、取り組んだ時点で既にアウトなんです。つまり、最後まで楽しむことのできた人が成功するのだということを言っています。そのためには、仕事そのものが楽しくなければだめだという話です。やはり、ある程度仕事は楽しくなければいけない、仕事に遊びの要素が加わらなければいけないということをリング・グラットンは言っているのです。これを読んでいるときに思い出したことは、少し古くなりますがデール・カーネギーの『人を動かす』というビジネス書に書いてあったことです。最初に出た翻訳は1936年で、私の好きな言葉の1つであり、こちらの方がわかりやすいと思いますので紹介します。

「仕事がおもしろくてたまらないくらいでなければ、めったに成功者にはなれない。まるでどんちゃん騒ぎでもしているようなぐあいに仕事

を楽しみ、それによって成功した人間を何人か知っているが、そういう人間が真剣に仕事と取り組み始めると、もうだめだと。だんだん仕事に興味を失い、ついには失敗してしまう。」⁴⁾ このように、おもしろい表現をしています。

3. 100年時代の人生戦略『ライフ・シフト』

(1) 3ステージからマルチステージへ

今日本で、10歳の子どものが100歳まで生きる確率は50%以上、2007年生まれの子どものが100歳まで生きるのは半数以上だと書かれています。だから、100歳は当たり前前の時代です。日本語版の序文で、「問題は多くのことが変わりつつあるために、過去のロールモデル、お手本の人物があまり役に立たないことだ。あなたの親の世代に有効だったキャリアの道筋や人生の選択が、あなたにも有効だとは限らない。」⁵⁾と、『ワーク・シフト』と同じことを言っています。さらに、「人生の道筋に関する常識は既に変わり始めている。日本でも終身雇用が当たり前ではなくなった。若者たちの生き方も変わりつつある。本書では、読者が長寿化を災害、嫌なことではなくて、いいことにするためにどのように人生を築くべきかを考える手引としたい」と書かれています。就職も新卒が尊ばれるのは、この日本ぐらいです。なぜ新卒が就職するのだと企業が決められているのでしょうか。大学を卒業して5年経過してから就職する人と大学を卒業したばかりの人とでは、なぜ卒業したばかりの人の方が有利なのでしょう。これは、日本が決めていることです。いわゆる一斉にスタートです。教育は、同年代で一斉にスライドしていき、大学が終わると一斉に就職し、60歳を過ぎたら一斉に退職します。このような同世代一斉運動みたいなステージ、3ステージの生き方というのがこれからは、成り立たなくなっていくと思います。なぜなら100歳まで生きるからです。65歳から年金だけでは幸せになれません。そういう時代に来ているのです。今までの3ステージではなく、マルチステージの生き方として、エクスプローラー型

(探索者、探し求める人)、インディペンデント・プロデューサー型(独立生産者)、ポートフォリオ型(複選型活動者)の3つがあります。

(2) 100年ライフ構想

リンダ・グラットンが心理学者ですから、『ワーク・シフト』は自分1人で書いていますが、『ライフ・シフト』の本は経済学者と一緒に書いています。こちらでは、よい人生を送りたければよく考えて計画を立て、金銭的要素と非金銭的要素、経済的要素と心理的要素、理性的要素と感情的要素のバランスを取ることが必要だということが書かれています。

100年ライフでは、お金の問題に適切に対処することは不可欠ではありますが、お金が最も重要な資源だと誤解してはならないということです。家族、友人関係、精神の健康、幸福なども極めて重要な要素となります。さらに、長寿化をめぐる議論は、お金の問題に偏り過ぎています。100年ライフへの備えは、資金計画の強化だけで事足りるものではなく、スキル、健康、人間関係といった資源が枯渇すれば、長いキャリアで金銭面の成功を得ることは不可能であります。その一方で、金銭面で健全な生活を送ることができなければ、お金以外の重要な資源に時間を投資するゆとりを持つことはできません。金銭面と非金銭面のバランスを適切に取ることは、短い人生でも難しく、人生が長くなればさらに一層難しくなりますが、バランスを取るための選択肢が広がる面もあります。人生が長くなり、人々が多くの変化を経験し、多くの選択を行うようになれば、選択肢を持つことの価値が大きくなります。要するに、選択するとは、選択肢(=オプション)を閉ざすことにほかなりません。では、オプションを持っておくということは大事なことです。いつこのカードを使うかということも選択になります。私たちは、今まで同世代一斉行動でしたから選択する必要がありませんでした。みんなが行くから私もという感じでただ何となく一緒になっていました。しかし、これからは各々で動いていく状況に来ていま

す。

寿命が延びるといことは、老いて生きる期間が長くなることだと思われているようですが、そうではなく、若々しく生きる期間が長くなるということです。具体的には、①選択肢を狭めないように、将来の道筋を固定せずに柔軟な生き方を長期間続けるようにする②生涯を通じて高度な柔軟性と適応能力を維持する③エイジ(年齢)とステージの不一致から世代間の相互交流と相互理解を図るということです。

(3) 有形資産と無形資産

この本の中で3世代の家族(1945年生まれのジャック・1971年生まれのジミー・1998年生まれのジェーン)が例に挙げられています。問題は、何が起きるかわからなければ、何かに対して備えることは難しいということです。1945年生まれのジャックと異なって長い間働く1998年生まれのジェーンは、生涯を通じより多くの変化を経験して、より多くの不確実性に直面することになります。そこで、ジェーンに必要なようになることは、もっと柔軟性を持ち、将来の方向転換と再投資を行う覚悟を持っておくことだということです。ここでポイントになることは、資産という考え方です。資産というのは、ただ土地を持っている、建物を持っている、何か株を持っている、ビットコインをいっぱい持っているなどということではなく、ある程度の期間にわたり、自分にとって恩恵を与えてくれるものが資産です。それはしばらく存続する可能性はあります。しかし、管理や投資をしなければ価値が下がっていくものが資産です。例えば、健康な若々しい肉体も資産です。これが私たちに恩恵を与えてくれます。お金や土地も、もちろん資産です。ただ、資産には有形の資産と無形の資産があると言っています。有形の資産は見ることができ、数値化ができ、ある程度自分は今、資産が1000万ぐらいだとか、土地もあるなどと計算できるような資産であり、売買できるものです。これに対して、無形資産とは見えない資産のことであり、代替がきかない資産(例

えば友情関係なども含む)のことで。

無形資産をグラットンは、3つに分けています。

生産性資産(スキル、知識、仲間、評判)、活力資産(身体的・精神的な健康と幸福、良好な人間関係)、変身資産(自己理解・多様な人間関係、柔軟性、ネオテニー、新しい分野にオープン)とし、1つ目、2つ目はよく言われる話です。中身は違いますが、1つ目は要するに実際の生産性を高める資産です。自分が今から収入を得るために、自分の収入をどう得るかということです。2つ目の活力を高める資産は、自分を強くしてくれる、元気にしてくれるような関係性とか、あるいは身体的・精神的な健康も1つの資産であり、私たちに恩恵を与えてくれるものです。3つ目の資産は変身を容易にするもののことで、これが先ほど話した柔軟性を持つことにあたります。何が起るかわからない世の中ですから、例えば日本がいきなり攻撃されて、私たちは難民になるかもしれません。難民になったとき、すぐに対応できるでしょうか。私はおそらくできないと思いますが、そういう変化に対応できる能力がこれから求められます。このような大げさなことでもなく、自分が働いている会社が潰れたらどう対処するかということです。とにかくグラットンが、変身資産が必要だと強調しています。つまり、前の立場を失い、新しい立場にはまだ移行し切れていない曖昧な状態のとき、自分の落ちついた場所もない、そういう不確かな状態に耐える能力がこの変身資産なのです。移行を成功させる条件としては、幾つかのあり得る自己像を知ることです。よい意味であり得る自分もあれば、悪い意味であり得る自分もあります。未来にどのような自分があり得るのかを知り、そのあり得るパターンA、パターンB、パターンCでどこに自分が行くのか、どれで行く可能性が高いのか、このまま続けていけばこうなるだろうという自己像を知っておくということです。そして今の行動を変えていきます。そのためには、新しい人的ネットワークが鍵となります。新たなあり得る自己像を自分で知り、どこに合わせていくのか。その自己像は、できれば将来的に

よい感じになる自己像に自分を調節していくことが大事です。それにはやはり、新しい経験に対して開かれた姿勢を持つことが重要となります。つまり、受け身ではなく、自分自身が行動しなければなりません。

(4) マルチステージの生き方

そこで先ほど話しました、同年代が一斉にスライドしていく生き方から、マルチステージの生き方へシフトしていくことが必要となるのです。エクスペローラー、インディペンデント・プロデューサー、ポートフォリオ・ワーカー、という3つはこの本の要でもあります。

エクスペローラーというのは探索者、つまり自分がこれから何になるのか、あり得る自分を探している人です。自分を日常的な生活から一旦切り離して、自分の今の世界、生活を無理やり止めて違う世界に行くということです。傷つけられたりしますけれども、今までの自分の価値観を問い直して、自分の一貫性に揺さぶりをかけ、自分の多様性を増やすのです。

次に、インディペンデント・プロデューサーとは、自分が受け身かつ消費者ではなく、つくり出す側にまわることです。お金とか結果よりもその活動自体を目的とし、楽しむということです。例えばNPOを立ち上げたとします。すると起業しましたという様々な人が集まってきて、様々なおもしろい関係性ができ上がっていきます。インディペンデントとは独立している、1人で立っているという意味ですが、他を無視しているのではなく、関係がつながっていくプロデューサー、生産者、つくり手になるわけです。受け手で自分が命令に従うだけではなく、組織の中に入り、自分で何か起こしていくというやり方です。そこで自分をしっかりアピールし、評判をつくっていくということをここでは言っています。

最後のポートフォリオ・ワーカーのポートフォリオとは、自分の複数の能力をカードにします。例えば、自己アピールのためにA、B、C、D、Eの作品を用意しておき、伺う会社や会う人によっ

て持って行くカードを選びます。自分の今持っているストック、多様性をそれぞれのときに合わせてアレンジすることがポートフォリオです。ですから、ポートフォリオ・ワーカーというのは、自分の持っている多様性を使って、活動を変えていく働き方のことを言います。1個しかできない人は、他のことはできないこととなりますので、異なる種類の活動を同時並行である程度取り組んでおくことが大事です。過去の経歴を活かし、未来につながる新しい学びに取り組みながら自分の多様性を増やしていくということです。

ここで出てくる問題点は、切りかえコストです。どういうことかと言いますと、1つのことを継続するということは、その能力が上がるので生産性が高まります。しかし、多様になりますと、一個一個の能力が下がっていきます。それを移しかえるための時間とエネルギーが過大な負担となるからです。例えば、ピアノ演奏者がバイオリンや複数の楽器を演奏することはありません。陸上の場合も、100mとフルマラソン、両方の選手である人はほとんどいません。遠ければ遠いほど切りかえることが大変です。しかし、どちらも持ち合わせていることができれば生き残りやすいこととなります。今は100mのスペシャリストになるよりも、3つの種目を同時にできる人の方が、うまくいくかもしれないという時代に来ているということです。つまり、世界一にならなくても、日本一を3つつくるという生き方ができますと、天才ではない人にも選択肢が増えることとなります。

そこで、さらに問題となるのは一貫性と多様性です。多様性ばかり持っている、自分のアイデンティティがわからなくなり、何も身につかないこととなります。多様性と言いましても、数多くということではなく、幾つかの専門性をつくるとよいと『ワーク・シフト』で挙げていたように2つ、3つぐらいのことです。このバランスが大事であります。

(5) 異世代が混ざり合う時代

マルチステージの人生が一般的になれば、異な

る年齢層の人たちが同じ経験をする機会が生まれます。固定観念と偏見を打破する手だての1つは、集団間の接触を増やすことです。異なる年齢層の人たちが触れ合う機会が増えれば、人的ネットワークの年齢的な均質性が崩れ始めます。異なる世代の人と会話をしますと、なかなか理解してもらえず苛立つことがあります。この苛立つことがよいことなのです。いつも心地よいところだけにいますと人は成長しませんので、苛立つことにより自分の変身能力を高めていくわけです。このような人的ネットワークができていきますと、高齢者が別世界の住人という状況は変わり始め、自分がいわゆる高齢者と言われる年齢になったときにも、いかに若い人たちと交流するかを考えるようになります。年齢的な均一性の高い社会が解体に向かっていき、異世代が混ざり合う時代は好ましいことだとグラットンと言っています。異世代の触れ合いが増えれば、年齢層の異なる人の間に深い友情が形成され、我々と彼ら、俺たちとあいつらというような境界が崩れ始めます。そうなれば、人々は幾つもの視点を持てるようになり、世界に対する見方が広がっていきます。長寿化がもたらす魅力的な要素の1つは、4世代同居家族です。100歳まで生きますから、4世代同居が可能になるということです。

(6) リンダ・グラットンの考え方

ここで話を一気にひっくり返します。最後のページあたりにランペドゥーサの小説『山猫』に登場する君主が「自分が実際に触れて愛する人たちが生きている間のことしか心配できないと思っていた。同じように考えている人も多だろう。まだ生まれてもいない世代の幸せを考えて行動するのは難しい。」⁶⁾とあります。つまり、自分の子どもたち、そして、おそらく孫たちが生きている間ぐらいのことしか私たちは考えられないと言っています。まだ生まれてもいない世代の幸せを考えて行動するのは難しく、自分のひ孫のことまで考えられないということです。しかし、長寿化が進めば、人々は多くの世代と触れ合うよう

になります。気候変動の予測に取り組んでいる科学者の中には、2100年までに地球温暖化が深刻な状況になる可能性があると考えた人もいます。2100年と言われると遠い先の話に思えますが、それは私たちが実際に触れて愛する人たちが生きているうちに経験するかもしれない問題なのです。100年生きることであれば、自分の子どもがそこまで生きるわけですから大切に未来のことも考えなくてはいけないでしょうというのが、バイ・リンダ・グラットンです。

ここに私はとても違和感を持ったわけです。自分の目の前の人のことしか考えられないのは、随分と即物的だと思いました。

4. 木に学べ

対照として取り上げますのは、全く違う世界の西岡常一という法隆寺の宮大工の話です。この人は「いろんな人がぎょうさん法隆寺を見に来ますが、ただ、世界で一番古い木造建築だから見に来るんじゃない意味がありません。古いだけがいいんじゃないや。そこに落ちている石ころのほうが古いや。法隆寺は1350年、石ころは何億年や。だから、古いからここを見に来るんじゃないや。我々の祖先である飛鳥時代の人たちが建築物にどう取り組んだか、人間の魂と自然を見事に合作させたものが法隆寺やということを知って見に来てもらいたいや」⁷⁾と言っています。建築物は、時代が新しくなるにつれて構造の美しさというのは失われていき、その失われていく様子を法隆寺では一目で見ることができます。法隆寺と対照的なのが日光東照宮です。日光は構造よりも「飾り」を選んだのです。法隆寺はつくってから1350年目に解体修理をしています。日光は350年程で解体修理を迫られ、いかに構造を無視してつくられたということがわかります。350年も経過していればよいと思いますが、法隆寺を建立した飛鳥時代の西岡棟梁級に言わせれば、350年ではだめだという話です。法隆寺は昭和の大修理で、飛鳥時代のも解体し、藤原、室町時代のも解体修理せね

ばなりませんでしたが、室町時代のものは650年しか保てなかったのです。創建当時、1350年の半分しか保つことができなかったということは、レベルが違います。

飛鳥時代の釘についても後半で言っています。

飛鳥時代の鉄は強いので1000年は保てます。法隆寺の飛鳥時代の部材から釘を抜きますと歪みますが、この歪みさえ直せば飛鳥時代の釘はまた使えるというのです。今まで1300年保っています。これからまた1000年は保てます。このような鉄でしたらヒノキの命（鉄よりもヒノキの方が長生き）とあまり変わりません。外側は錆びていますが、日本刀をつくる方法と同じで、何回も折って折り返して釘にしています。折っては打つ、折っては打つということを繰り返すわけです。顕微鏡で見ますと、何千枚という層があることがわかります。切ってみると、目があるわけです。仮に最初の層が100年保ち、次のものが出てきてまた100年保ち、さらに100年保つというように、だんだん細くはなりますが、腐らない釘だと言っています。

私は、元々インド哲学・仏教学を研究していますので、グラットンの100年とは、なんと短いことを言っているのだと思うのです。江戸時代まで日本は、輪廻思想というものが常識でしたが、輪廻しますと次の世代まで残るわけです。でも、金沢大学の学生に輪廻を信じますかと尋ねたところ、科学的には証明できないのでわかりませんと答える人がほとんどです。倫理観としては、輪廻すると1万年続きますからおもしろいと思います。ですから、私たちの「人生は100年である」と言いますと、とても長いように思われますが、この発想自体が新し過ぎます。西岡棟梁まで辿りますと1000年、1500年までになるのです。

5. 未来を築く発想

リンダ・グラットンの考え方は、とても参考になります。これだけではとても危険であると私は思っています。なぜなら、グラットンの考え方は、

自分のことであり、自分の子どものこと、いわゆる目に見える4世代目までは大切にできるでしょうという発想だからです。これは、逆の言い方をしますと目に見える人しか大切にできないこととなります。私たちの想像力はそれほど貧困になっているのでしょうか。これがベストセラーだと言い切る日本、これをわざわざ取り上げること自体が非常に私は疑問に思います。もちろん、リンダ・グラットンのことは心理学者としてとても評価をしています。しかし、私たちはそれだけで染まってはいけません。そうではないものも含みながら、新しいことを考えていかなければなりません。新しくもあり、かつ古いこともです。もちろん、西岡棟梁のやり方は、リンダ・グラットンも言っているとおり、そのまま今の社会に取り入れても通用しません。釘を打っていたら、仕事はなくなります。ではどのようにしていくとよいのでしょうか。1000年先まで保つことができるようなものをつくる仕事とは、どのようにすれば残していくことができるのかという話であります。

もう一つ、社会デザイン研究科で有名な河井醉茗の「ゆづり葉」を紹介します。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、朗読します。

子供たちよ

これは譲り葉の木です。

この譲り葉は

新しい葉が出来ると

入り代つてふるい葉が落ちてしまふのです。

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作に落ちる

新しい葉にいのちを譲つて――。

子供たちよ

お前たちは何を欲しがらないでも

凡てのものがお前たちに譲られるのです。

太陽の廻るかぎり

譲られるものは絶えません。

輝ける大都会も
そつくりお前たちが譲り受けるのです。
読みきれないほどの書物も
みんなお前たちの手に受取るのです。
幸福なる子供たちよ
お前たちの手はまだ小さいけれど――。

世のお父さん、お母さんたちは
何一つ持つてゆかない。
みんなお前たちに譲つてゆくために
いのちあるもの、よいもの、美しいものを
一生懸命に造つてゐます。
今お前たちは気が附かないけれど
ひとりでのいのちは延びる
鳥のやうにうたひ、花のやうに笑つてゐる間
に気が附いてきます。

そしたら子供たちよ
もう一度譲り葉の木の下に立つて
譲り葉を見る時が来るでせう。⁸⁾

大学院生のときにこれを初めて読み、最後の「そしたら子供たちよ もう一度譲り葉の木の下に立つて 譲り葉を見る時が来るでせう」に少し痺れました。そして、最も紹介したい部分は、「何一つ持つてゆかない。みんなお前たちに譲つてゆくために いのちあるもの よいもの 美しいものを 一生懸命に造つてゐます」です。この部分に私は仕事の本質があると思います。自分のためにはないものをつくるのが自分の誇りになります。西岡棟梁は当然 1500 年後に生きていませんから見ることではできません。飛鳥の人たちは 1000 年後にこのような社会があるとは想像もしていないでしょう。しかし、1350 年後まで残るものをつくりました。このような発想は、リンダ・グラットンにはほとんどありません。リンダ・グラットンの考え方は、この現代社会がつくった考え方です。

6. 日本に合う生き方・働き方・齢の重ね方

最後に、今日は会場にいらっしゃる多くの方が幼稚園、小学校の関係の方だとお聴きしましたので、沖縄の与那嶺貞さん（もうお亡くなりになっています）を紹介したいと思います。明治 42 年生まれの戦前の方です。沖縄の読谷村（ユンタンムラとも言われる）で生まれ、1928 年に 19 歳で首里女子工芸学校研究科を卒業しました。その後、戦争があり、夫を亡くし、戦後、幼稚園、小学校の教員をしながら 3 人の子どもを育てていました。与那嶺貞さんは、55 歳のときに村長から、読谷村の復興をお願いされます。若いときに 1 年だけ織物を経験したことがあったという過去の自分のものを使いながら 55 歳から新たに始めたのです。結論を言いますと、90 歳で人間国宝になりました。当時の夫がいない状態で子どもを育てることは今以上はかなり大変なことであったと思いますが、人生 100 年ですから、50 歳までがどれほど大変であっても、そこから持ち返すことができるということです。さらに、もう一つこの人のことで重要なことは、自分が現役であり続けたいと思っていなかったことです。次の世代を育てようとしたということ、そして、この文化を次に残したかったということです。1000 年続く文化かもしれないものを残そうとしたということが、結果的にこの人を人間国宝にしたということです。

仕事を続ける、生涯現役でいたいなどいろいろな考え方はありますが、私たちはリンダ・グラットンのことを学びつつも、それ以外の元々日本に合った考え方も踏まえながら、新しい動きをするべきだと思います。政府が提言しているから、アメリカで行われているからという形ではなく、私たちは、日本に合った自分たちの生きること、働くこと、齢を重ねるということを考えていかなければいけないと思います。

どうもご清聴ありがとうございます。

引用文献

- 1) リンダ・グラットン著 池村千秋訳『ワーク・シフト』プレジデント社 2012年 p. 8
- 2) 同上書 p. 19
- 3) 同上書 p. 176
- 4) D・カーネギー著 山口博訳「PART2 人に好かれる六原則 2 笑顔を忘れない」『人を動かす』創元社文庫版 2016年 (初版 1936年の邦訳)
- 5) リンダ・グラットン/アンドリュー・スコット著、池村千秋訳『ライフ・シフト』東洋経済新報社 2016年
- 6) 同上書 p. 387
- 7) 西岡常一『木に学べ 法隆寺・薬師寺の美』小学館ライブラリー 1991年 p. 67
- 8) 河井醉茗「ゆづり葉」『花鎮抄』三好達治編『日本現代詩大系 第6巻 近代詩3』河出書房 1951年 pp. 48-49